



1番ホール

その247

クローズアップ21

質向上と省力化 伊豆下田カントリークラブ

コーライ1グリーン化、無人芝刈機での持続可能な運営

新型コロナウイルスは、新たな生活様式と価値基準の変容をもたらした。ゴルフ場運営は変革を余儀なくされた。感染予防のために接触を避けるよう行動制限が求められた一方で、ゴルフは3密を避けやすいスポーツ・レジャーとして見直され、都市部の練習場を中心に利用者数の回復も目覚ましい状況にある。

しかし、都心部に近いゴルフ場で利用者が回復しても、館内での飲食は手控えられ、飲食関係での回復はまだまだ。

今回取材した伊豆下田カントリークラブは、今年4月からコーライシニングルグリーン化と無人芝刈り機でのコース管理を始めた。現状の需要動向と、少子高齢化、地球温暖化に対応する持続可能なゴルフ場運営に向けて、明確な新機軸を打ち出したものだ。

同CCのコース管理を含めた運営状況を取材した。

伊豆半島南端のリゾート地 コロナ禍でスループレーに移行

同ゴルフ場のある静岡県南伊豆町は伊豆半島の南端に位置し、人口7千人ほど。幕末の黒船来航な

ども知られる下田市（人口2万人）に隣接する。マリンスポーツや金目鯛なども有名で、首都圏から車や電車（伊豆急行）で3時間ほどに位置する。伊豆半島は2018年4月にユネスコ世界ジオパークに指定されるなど豊かな自然環境で知られるリゾート地だ。

伊豆下田CCは1975（昭和50）年9月に開場。横浜CC（横浜市）が姉妹コース。元々リゾートコースであったが、昨年の新型コロナウイルス禍で様相が一変したという。

そこで緊急事態宣言が発出された後の昨年4月21日から感染予防対策としてスループレーによる営業に転換。基本的にクラブハウスはトイレ等を除いて使用不可とし、クラブハウス横手にあるマスター室（スターターハウス）前でプレー受付、料金の前受けを行う、暫



スターターハウスで、予約なし到着順にてスタート

定的な運営体制に移行した。

レストランは営業せず、昼食はお客様に持参してもらおうもので、浴室やロッカーは使用しない運営とした。昨年11月からは食事される方のためにクラブハウス2階のロビーをイートインスペースとして開放（お弁当は前日までの予約、お茶付き850円で販売）。1階ロビーは休憩用に、女性にはシャワーも開放（男性は別棟ホテルサローム内の浴場を案内）した。

さらに今年4月1日からは、運営体制の効率化を促進するため、次の対策を講じた。

①「ベントグリーン」の廃止とバンカーの改修。コース作業の効率化を促進するため、全ホールコースでシングルグリーン化する。併せて、コーライグリーン周りのバンカーを改修する。

バンカー改修は横浜CC近代化改修に従事したクイン・トンブソン氏が担当（同氏は横浜CCの他に廣野GC、太平洋クラブ御殿場コース、芥屋GCでバンカー改修を手掛けた実績がある）。

②「自律走行芝刈り機（無人芝刈り機）」の導入。フェアウェイの



取材中、14番グリーンでクイン・トンブソン氏がバンカーレーキにて黙々と作業中

刈込み頻度を上げて良好なコースコンディションの提供ならびに美観の向上を図る。またコース管理委託先よりフェアウェイの刈込みは自社対応とすることで管理費用削減を促進する。

5月中旬より開始したコーライシングルグリーン化改修工事は、1、5、13、14番はベントグリーン側へコーライグリーンを移設する計画とした。

予約なしでも回り放題 1Bも受付、自主性に任せた運営

これら案内は鈴木喜代孝支配人がfacebookで逐一発信した。

また今年6月1日からは営業時間を7時から早めた。昨年のコロナ下では8時受付開始、8時30分からスタートだったが、これを



午後2時までに戻れば回り放題、プラス9Hは無料

9月30日までの期間で、7時から受付開始で順次スタート、午後2時までのターン制限時間までは回り放題。しかも午後2時までに戻れば追加料金なしでプラス9ホール回れるので場合によっては1・5Rや2Rも回れる。何時何分などのスタートコントロールはしておらず、土日を含め回り放題は10年以上からの伝統になっていた。会員利用がほぼ半数と多く、プレーヤーの自主性に任せたスタイルとなり、スタッフも限られた人数で対応することとなった。

メンバーのプレー料金は平日4500円、土日祝日5500円。ビジターのプレー料金は概算は平日8千円（メンバー同伴のゲストは7500円）、土日祝日で1万1千円（1万円）〜1万3千円（1

万2千円）。乗用カート（2人乗りでないし4人乗り）でのフェアウェイ乗り入れ可（状態により不可）。到着順で予約なしでのプレーが可能の他、乗用カートは自走式で、もちろん早い時間にスタートして、午後は別のレジャーに充てたり、早い時間に帰ることも可能だ。

午後3〜4時までは9ホール限定の薄暮プレーも受け付けている。しかもメンバーはカート利用で2700円、担ぎだと1700円と安い。ビクターはカート利用で平日4250円、土日祝日5250円。しっかりとメンバー優遇を行っている良識ある運営だ。

この伊豆下田CCのスタイルは、中・上級者が集まるから成立しているもので、プレーは1バツグ（ただし1B割増料金有り）から受け付けており、コロナ禍にあつてこうしたゴルフ本来のスタイルでプレーできる穴場の存在。牧歌的な郊外のゴルフ場でゴルフを楽しむ雰囲気だ。

大手予約サイトでは「ここは大人だけの許される上質な楽園です。心の翼を休めて、贅沢な時間をこゆつくりお楽しみ下さい」と案内

無人芝刈り機の購入

している。



1B担ぎのプレーヤーも

導入した無人芝刈り機でフェアウェイの芝刈り作業を自前でを行い、コーライシングルグリーン化の改修に踏み切ったのも、地球温暖化の傾向と将来のゴルフ市場、同ゴルフ場の特性を見据えて決断したものだ。

マミヤOP製のIGNS（アイジーンズ）はGPSと慣性航法により車の位置を検出し、予め作成された経路を自律走行させる制御システムを搭載した自律走行芝刈り機で、同社のスタッフが一人で操作。ゼブラカットのプログラムで作業している。

導入前のプログラミンはマミヤOPの専門プログラマーが行い、テスト走行などで、引き渡しまでに3カ月かかった。プログラマーがGPSを背負いコースを歩いて



自律走行芝刈り機でフェアウェイの芝刈り作業を自社スタッフが作業

地図を作り、バンカーの位置などと一緒にパターンを組んだ。また自動走行に備えて、ゴルフ場では一部の伐採も行った。他コースでは15ミリカットのところハローや細かいアンジュレーションもあるので同CCでは調整して刈っているという。

取材した日の午後は「17番の後、今16番を行って、夕方に自動走行で5ホール刈るプログラム」だった。夕方以降の自動走行中、担当者は自宅に帰ってスマホで進行の確認をするため、休みの感覚はないようだ。作業終了後はマスター室の前あたりに帰ってくる設定で、問題がなければ操作担当者もコースに戻る必要はない。

FWの芝刈りは、まずはFWのメインを刈り、その後外周やバンカーの周りを刈って1ホールが終了。所要時間はP4で1時間位。P5だと2時間位。同CCとして



ゼブラカットのプログラムで自動走行中。操作担当者は夕方自宅で進行を確認

は4日間で18日を終了したい考えで、天候もあり難しい時もあるが、月6回刈込みができればクオリティも上がると説明している。

担当者によると、実は弱点もあって、電波障害により途中で止まったりすることもあるという。それに刈込が不十分だと、刈り直す機能があり、ぬかるんでいるところを何回も刈り直すのを防ぐためコース状態に応じて見極めが必要だという。

作業の前はバンカーレーキやテ

イマークなど、刈る作業にジャマになるものはすべて端に寄せて、刈らない場所に置いておく。あとはFWを歩いてゴミを拾ったり、お客様がプレーしている時間は機械に乗るようにして、お客様に接近して恐怖心を与えないように注意しているという。

また機械であることから週に1回グリスを注入したり、一定期間の距離走行でエンジンオイルの交換も必要。作業終了後はリール刃やフィルターの掃除も行う。メリットも大きいのが、まだデメリットもあることを認識しているそうだ。

でもやはりスマホのスタートボタンでパッと動き、自律走行（芝刈り）を続けている姿を見ると「便利な時代になったものだ」と感心した。

1万5千人想定での予算

では、現在何名で運営を行っているのか。鈴木支配人によると、コースの委託を除き、運営スタッフはアルバイト含めて12名。昨年は閉めていたホテル（洋室ツインのみ16室）も宿泊のみで飲食は提供していない。

かなり割り切った運営スタイル



平面は全部フェアウェイ。ラフは自然回帰型のサスティナブルな管理

で、県外のお客が少なくなってきた（半数が伊豆半島南部のメンバー利用）故の判断。今後はわからないので、予算を少なくし、人数を絞ってやれるところまでやることにしたという。

飲食を始めると原価がかかるので、再開する時期の判断も難しい。コロナ禍でスループレー、レストランなしの営業としたが、無理に単価を下げなかった。

「お客様は自分でお弁当を作ったってきたり、コンビニで買ってきたり、午前中にラウンドして帰るとか。そんな感じ。目一杯回りたい人はおにぎり片手に回っています」。これが今や、伊豆下田CCのスタイルになってきた。それに慣れてきたお客様もあり、他と同じようなスタイルでは立地的に勝負にならないと考えているとい

う。

無人芝刈り機での管理は、同CCが横浜CCの西コースの近代化改修（2016年改修終了）のころよりFWを広げる管理を行ってきたことから、導入は割とスムーズだったようだ。

支配人は「平面は全部フェアウェイで、だいぶ前からラフは自然のままに自然回帰型のコース管理に変えています」と話す。ティーイングエリアは横浜CC西コースのように1ピースではないが、ティーの周りはもう手付かずの感じの管理という。

グリーンについては、「元々はグリーンがメインでして、プロテストの会場となっている時からメインはグリーンでした」と語り、グリーンはベントに比べ、夏場の心配がいらぬし、費用も手間も格段に違う。それに伊豆半島では川奈ホテルが有名で、この間支配人が見てきて、「今の時期スピードは出ませんが、すばらしいコーライグリーンでした」と話しており、コーライグリーンの品質にも自信があるようだ。

グリーンの改修工事は、年内の終了を目指しており、今年張り替



15番から16番に向かうカート道から見えるジオサイト。ゴルフ場の位置は海拔220m

えたグリーンが年内に使えるかどうかは養生次第としている。

ところで、このスタイルで年間予算や収益をどの位と試算しているのか。支配人は「予算的には1万5千人目標なので周りのコースと比べたらだいぶ小規模」という。1日20〜30組、1バッグまで受け入れているので、1日平均40〜50人だという。年間入場者数はピークで3万人以上、例年は2万〜2万5千人位というから少な目な目標だが、首都圏からのビジターの来場が増えれば収益が出るレベルとしており、おそらく向こう10年でも再来のないようなコロナ下ベースの予算は盤石に近いかも知れない。

思い切った運営決断は、一般社団法人（当初は中間法人）など過去の会員との関係構築の成果でも

ある。

同CCが中間法人を設立して会員預託金の保全措置を打ち出したのが2003年。預託金85万円を出資してもらい、差額を15年分割で返還した。これが一段落し、2016年12月に（株）横浜国際ゴルフ倶楽部の新設分割で（株）伊豆下田カントリークラブが経営会社となった。子会社となったもので、預託金返還が一段落したことは経営の自由度も高めたようだ。また2019年度から会員の年会費を2倍の3万6千円に値上げしていた。現会員数は約1300名。コロナ禍での危機的な落ち込みでも無人芝刈り機を購入して、次の時代に備えられる背景ともなった。

この予算感で無人芝刈り機の管理、運営をゴルフ場が続けられれば日本のゴルフ場も変わっていくに違いない。

課題は6月から午前7時スタートにしたことで、スタッフのやり繰りが大変という。年中無休の営業の中で、週休2日の休暇を続けるには収益を増やして人数を増やすか、さらなる省力システムを導入するか。運営リノベーションは今回で終わりではなさそうだ。